

「グロエキ」開始の年

ー 2022 年度のグローバルラーニングセンター（GLC）ー

グローバルラーニングセンター長
齊藤 眞美

1. 「グロエキ」とは

「グロエキ」は、「YGU グローバル・エキスパート認定」の通称である。グロエキは、山梨学院大学グローバルラーニングセンター（以下、GLC）と国際交流センター（以下、IEC）のミッションである全学国際化¹⁾を、教育活動全般において推進するための包括的手段として考案された制度で、2022 年度より運用が開始された²⁾。GLC は国際化に関する教育及び研究を担う教員組織で、IEC は全学国際化に関連する業務を担う事務組織であり、両者はグロエキに限らず相互に連携を取りながら大学全体の国際化推進を目指している。

グロエキは、「GLC と国際交流センターが提供する国際化に関する機会を活用し、語学と国際共修の両方面で高度な実践力を修得したと認められる学生を表彰する制度」と定義づけられる（トンプソン, 2022, p.29）。「国際化に関する機会」には、1) GLC の提供する正課科目である語学（英語、中国語、日本語）科目や国際共修科目を履修して単位を修得すること、2) 正課外活動である国際交流イベントやセミナー等に参加すること、3) 留学プログラムに参加し、修了すること、4) TOEIC、HSK（漢語水平考試）、日本語能力試験等の語学試験を受け、一定の成績を得ることの 4 種類がある。

制度の概要は、以下の通りである。まずは「国際化に関する機会」である上記 1) ～ 4) の諸活動に対し、ポイントを付与する。これにより、学生一人一人の諸活動の履歴が、累積ポイント数（pt）として可視化される。そして、学生全体のポイント獲得状況から、本学における「国際化」の現状や動向が把握できる。また、全体のポイント獲得状況から、次年度に向けた改善策や目標値の設定が行えるようになる。次に、最高到達点である「エキスパート」を 500pt とし、「エキスパート」到達までのステップとして「ルーキー」80pt、「ジュニア」150pt、「シニア」300pt を設ける。こうして最終ゴールに向けた各ステップを示すことにより、個別の学生の履歴に対し、また全体の動向に対し、形成的評価が可能となる。学生にとっては途中の各ステップに達したことの達成感が得られると同時に、次のステップを目指す動機付けにもなり、教職員にとっては次のステップへと具体的なポイント数を示して誘導することが可能となる。グロエキ運用開始年である 2022 年度のポイント獲得状況（2022 年 4 月～ 12 月）や運営に関わる具体的な取り組みについては、本誌掲載プロジェクト報告「YGU グローバル・エキスパート認定 2022 年度報告—導入初年度の取り組み—」を一読いただきたい。

各ステップに到達した学生は、褒賞金の授与と共に表彰される。褒賞金は、「ルーキー」に対し 1 万円、「ジュニア」に対し 3 万円、「シニア」に対し 5 万円、「エキスパート」に対し 10 万円

である。褒賞金の意味は、「国際化の機会を十分に活用した」ことに対する褒賞であると同時に、途中ステップの表彰時には、次のステップへの誘導的意味合いもある。

2022年度は、対象となる正課科目がGLC提供科目に限定されていたが、2023年度には、GLC提供科目以外へも対象範囲を拡大し、一定の条件をクリアした、国際共修の要素を取り入れた授業も対象とする予定である。これに伴い、グロエキの定義を、「主にグローバルラーニングセンターと国際交流センターが提供する国際化に関する機会を活用し、語学と国際共修の両方面で高度な実践力を修得したと認められる学生を表彰する制度」と修正する必要がある。

なお、2022年度は、グロエキのロゴ（図1）ができ、ポイント対象となるチラシ等広報に用いられ、グロエキの認知度向上のために活用されている。



図1 グロエキのロゴ³⁾

2. マーケットインの語学教育

図2は、2022年度新任教員を対象としたキックオフミーティング用に作成した資料の一部であり、GLCが設立された2019年度以降、それぞれの年度を象徴する出来事を示している。



図2 GLCの動き：2019－2022

2019年度は「日本語の年」で、日本語科目の改編が行われ、2020年度より運用を開始した。2020年度は「国際共修の年」で、国際共修科目群が整理・体系化され、2021年度より運用を開始した。2021年度は「英語の年」で、日本人学生にとって選択必修科目であった英語と中国語が、2022年度から選択科目化されることが決まり、これに伴った改編が、特に英語科目で行われ、2022年度より運用が始まった。中国語は開講コマ数が選択必修時も英語ほど多くなかったため、選択科目となってもさほど大きな変更はなかった。2019年から2021年までの3年間で、GLCの提供する語学科目と国際共修科目の教育課程編成がほぼ終了し、グロエキ運用の準備も整うこととなる。そして、2022年度「グロエキの年」を迎えた。

GLCの語学教育について、近年、1つの特徴が顕著となり、潮流となりつつある。それは、マー

「グロエキ」開始の年 — 2022 年度のグローバルラーニングセンター（GLC） —

ケットインの語学教育である。マーケットインとは、主にマーケティングの分野で使われる用語で、市場や購買者という買い手の立場に立ち、買い手のニーズに合ったものを提供していこうとする姿勢である。このマーケットインは、対となるプロダクトアウトとの対比で用いられることが多い。プロダクトアウトとは、買い手のニーズではなく、逆に提供者側の考えに基づき製品等を提供する姿勢を指す。筆者がこのことばに出会ったのは10年ほど前で、NHKのビジネス英会話を担当したことのある講師（ビジネスパーソン）が、伝統的な英語教育をプロダクトアウトの発想であると批判し、マーケットインの実践的な英語習得の重要性を強調した文脈であった。当時既に日本語教育の分野でも、学習者中心の重要性が指摘されて久しかったが、実際には大学のカリキュラムや教員の特性といった教える側の都合でコース運営がなされている状況が多々見られ、マーケットインの教育という観点は、自己反省を促すと同時に新鮮な発想をもたらしたと記憶している。

ここ数年、GLCでの日本語教育は、マーケットインの語学教育という発想を底流として展開してきたと言える。2021年度よりAレベル⁴⁾の日本語I・IIで開始した「日本語学修ツアー」⁵⁾しかり、2022年度事業計画の一つである「留学生日本語力補強：日本語力に課題を抱える本学留学生のための教材開発」（本誌プロジェクト報告「山梨学院大学教材開発プロジェクトの報告—『日本語文法』教科書の開発を中心に—」を参照）しかりである。さらに、2022年度開始した西安交通大学とのダブル・ディグリー・プログラムにおける中国語教育は、究極のマーケットイン的発想の語学教育と言える（詳細は、本誌の実践論考「汉语教学模式的新探索」（中国語）、またはこの実践論考を簡潔にまとめた本誌FD報告「DDPプロジェクトにおける中国語教育」（日本語）を参照）。これらの潮流は、マーケットインの語学教育を通奏低音とする一方で、教員の高度な専門性とのコラボレーションである点が特徴的である。単に学生の立場やニーズを考慮するだけでは学修効果は得られない。全ての学生が自分自身の望むことを認識し、言語化できるわけではないからである。また、たとえ学生がニーズを認識し、言語化できたとしても、到達までの手段が提供されなければ学修効果につながらない。ここに、教員の高度な専門性に裏打ちされたマーケットインの語学教育の重要性がある。

3. GLCが開催したSD（Staff Development）とFD（Faculty Development）：2022年1月～2023年2月

GLCは、上記期間に、1) 全学教職員を対象とした「全学国際化推進のためのSD・FD」、2) 非常勤教員を含むGLC全教員を対象とした「GLC教員FD」、3) GLC常勤教員を対象とした「GLC（会議後）FD」の3種類のSD・FDを開催した。3)は、月に1度開催されるGLC会議の後に開催されたFDである。

1)のうち、SDについては本誌プロジェクト報告「山梨学院大学全学国際化SD研修報告—2022年度の取組み—」を参照されたい。FDについては、2022年2月24日に「YGUにおける留学生の動向とGLC日本語教育プログラム」を開催した。担当は、河野礼実特任講師、金桂英特任講師、及び筆者であった。2023年2月21日には、「YGUで学ぶ留学生の現状を知る」を開催した。担当は、河野礼実特任講師、金桂英特任講師、金丸巧特任准教授であった。

2) GLC教員FDでは、2022年2月8日に「授業設計ワークショップ」を開催した。外部講師として、明治学院大学心理学部教育発達学科根本淳子氏を招いた。2022年8月10日には「学習

国際共修・言語教育実践 第2号

効果を高めるフィードバック」を開催した。担当は、徳田恵特任准教授であった。2023年2月2日には、「語学教育・国際共修のための中国語・中国文化ワークショップ」を開催した。担当は、張立波特任准教授であった。なお、GLC 教員 FD は、徳田恵特任准教授が企画・実施を担当した。

3) GLC (会議後) FD の開催状況は表1の通りである。

表1 2022年度 GLC (会議後) FD 一覧

2022年度の目標：① GLC のミッションを考える (継続) 1, 3 ② セクションを越えてそれぞれの活動を知る (継続) 2, 4, 5, 6, 7			
	開催日	トピック	担当
1	6/1	国際化とは何か? その2	齊藤真美
2	7/6	<日本語セクションを知る> 国際共修・語学教育実践における Can-do リストの活用を考える	河野礼実
3	9/14	GLC はどのような人材育成を目指すか? その2	齊藤真美
4	10/5	<中国語教育を知る> DDP プロジェクトにおける中国語教育を知る	劉頌浩
5	11/2	<英語セクションを知る> 英語科目カリキュラム改編初年度 現状とその課題	秋田辰巳/ドッズ・アロン/ 寺澤君江
6	12/7	<国際共修セクションを知る> 多様性への意識を高める	寺澤君江/原百年/金丸巧
7	1/11	相互に業務内容を知る	齊藤真美

2022年度 GLC (会議後) FD 開催の目的は①「GLC のミッションを考える」、②「セクションを越えてそれぞれの活動を知る」で、いずれも2021年度から継続である。表1の1「国際化とは何か?その2」と3「GLC はどのような人材育成を目指すか?その2」が目的①に該当し、2「国際共修・語学教育実践における Can-do リストの活用を考える」、4「DDP プロジェクトにおける中国語教育を知る」、5「英語科目カリキュラム改編初年度 現状とその課題」、6「多様性への意識を高める」、7「相互に業務内容を知る」が目的②に該当する。各FDの内容については、本誌の各報告を参照されたい(6「多様性への意識を高める」を除く)。

2022年度の特徴は、2021年度には目的②で行われた各セクションのFDが主に説明型(一方的な情報提供型)であったのに対し、2022年度は、7月6日実施の日本語セクションによるFD、12月7日実施の国際共修セクションによるFDが、ワークショップ形式だったことである。双方の形式にメリットがあるが、いずれにしても、今後はこのFDを、GLC 教員間で情報・意見交換ができ、人的リソースとして相互に活かし合うことのできる機会としていきたい。

注

- 1) 「全学国際化」は、山梨学院大学における2大ビジョンのうちの1つで、もう1つは「教育の質的転換」である。この2つは2022年度に4月に就任した新学長が打ち出した「教学構想2022」へも引き継がれている。
- 2) 対象は、法学部、経営学部、スポーツ科学部の2022年度入学者である。
- 3) グロエキのロゴデザインは、IEC 村上昂音主幹によるものである。

「グロエキ」開始の年 — 2022 年度のグローバルラーニングセンター（GLC） —

- 4) A レベルとは、日本語レベルにおいて「学部授業受講に支障がない」レベルを指す。2022 年 3 月現在 C レベルまであり、B レベルは「学部授業受講にやや支障がある」レベル、C レベルは「学部授業受講に支障がある」レベルである。
- 5) まず教科書ありきの教育とは真逆の発想で、「大学環境や地域における生活及び学修に密着したテーマ（ユニット）を巡り、1 年次に必要な情報を得ながら日本語力及び日本語学修力を探究的に習得することを目的とした新日本語コースの通称」（齊藤，2022，p.3）である。実践内容については、河野（2022）を参照されたい。

参考文献

- 河野 礼実（2022）. 初年次留学生を対象とした大学密着型日本語科目の取り組み－留学生が順調に大学生活をスタートするために－ 国際共修・語学教育実践, 創刊号, 5-12. <http://id.nii.ac.jp/1188/00003922/> (2023 年 2 月 12 日)
- 齊藤 眞美（2022）. 甲府盆地を越えて世界へー『国際共修・語学教育実践』創刊号によせて－ 国際共修・語学教育実践, 創刊号, 2-4. <http://id.nii.ac.jp/1188/00003921/> (2023 年 2 月 12 日)
- トンプソン 美恵子（2022）. YGU グローバル・エキスパート認定 国際共修・語学教育実践, 創刊号, 29-32. <http://id.nii.ac.jp/1188/00003926/> (2023 年 2 月 12 日)

SAITO Masumi